

姫路市立美術館
研究紀要
第14号 ■ 2013年

B U L L E T I N
O F
H I M E J I
C I T Y
M U S E U M
O F
A R T

姫路市立美術館
研究紀要
第14号 ■ 2013年

B U L L E T I N
O F
H I M E J I
C I T Y
M U S E U M
O F
A R T

目次

ベルギーの画家ジュール・ヴァン・ド・レーヌの日本での 紹介について 山田 真規子	1~13
朝見香城の画業について 平瀬 礼太	15~26

ベルギーの画家ジュール・ヴァン・ド・レーヌの日本での紹介について

山田 真規子

姫路市立美術館は、1983年の開館以来ベルギー近代の美術作品を収集してきた。2013年に開館30周年を迎えた際、記念展として「エミール・クラウスとベルギーの印象派」という展覧会を開催した。この折に、展覧会を観覧に来られたある方が、ベルギーの画家ジュール・ヴァン・ド・レーヌの作品をご所蔵になられているということをお申し出になられた。このことがきっかけで、作品のご所蔵者である大島輝夫氏が、貴重なその所蔵作品「牡丹」(図1)の調査の機会を私たちに与えて下さった。本論は、このような経緯で書かれることとなったものである。はじめに、ご所蔵者大島様に、この度のご厚情に対して御礼を申し上げたい。



図1

1. ジュール・ヴァン・ド・レーヌについて

今日では、日本においてはおろか本国ベルギーにおいてもこの作家の名前を知る者は少ない。しかし日本におけるベルギーの美術の受容に目を向けたとき、この作家は、戦前の日本において初めて個展の開催された貴重な作家なのである。

まずは、このジュール・ヴァン・ド・レーヌもしくはジュール・ヴァン・デ・レーネ (Jules Van De Leene) の経歴について確認したい。ベルギーの美術家事典によれば、以下のように紹介されている¹。ブリュッセルのイクセルに1887年に生まれ、1962年に同じくブリュッセル近郊のオーデルヘムで亡くなる。イクセルの美術学校と、ブリュッセル王立美術アカデミーで学んでいるが、ブリュッセルでは、コンスタンタン・ムーニエやコンスタン・モンタルドに師事する。10年間ほど水彩で描いていたが、以後油彩でも描くようになる。取り上げる画題は幅広く、静物、花から、肖像、裸婦にまでおよぶ。風景画も、室内、屋外ともに描いている。その堅実な作風は、フランドル絵画とオランダ絵画の伝統に支えられており、実際オランダ滞在中には、フランス・ハルスそしてフェルメールに傾倒した。用いる技法も幅広く、水彩、油彩のみならず、木炭や版画もこなし、また光と色彩の表現にも優れ、厚塗りの質感を感じさせる照りのある絵具のタッチに特徴がある。

2. ヴァン・ド・レーヌの日本での紹介の機会

現在確認している範囲で、日本では戦前、この作家は三回の機会で紹介がなされている。その三

¹ 作家の経歴は以下の文献による。

Le dictionnaire des peintres Belges du XIV^e siècle à nos jours, La Renaissance du Livre, 1995, Vol. 2, p. 1006.

つを年代順に見ていきたい。

最初は、1924（大正13）年の「内務省社会局主催 白耳義國作家寄贈繪畫展覽會」。次は、1934（昭和9）年の青樹社主催の「ヴァン・ド・レーヌ作品展覧會」。三度目が、1936（昭和11）年の、同じく青樹社主催の「青樹社蒐集・歐州繪畫展覽會」となる。

①「内務省社会局主催 白耳義國作家寄贈繪畫展覽會」

「白耳義國作家寄贈繪畫展覽會」は、1923年9月1日に発生した関東大震災後に、チャリティー目的でベルギーの画家たちが絵画を販売し、その売上金を被災者支援に用いるという趣旨の展覧会であった²。日本での開催に先駆けて、宣伝のためにブリュッセルでも作品を展示した後、計134点の絵画が日本に送られ、1924年11月16日から22日まで、内務省社会局で作品の展示と販売がなされた。たった7日間の会期中に、約3万人もの来場者が訪れ、全作品が皇族を中心に売却されて、同展は大きな成功をおさめた。この展覧会については、既に指摘されている通り³、出品作家の大半が、エミール・クラウスやラルマンズ、レオン・フレデリックなど幾人かの例外を除けば、無名のアマチュア画家であったようだが、ヴァン・ド・レーヌも「ポアフォールの秋」という作品を1点出品している。この作品は、皇后宮職により買い上げられたという。

②「ヴァン・ド・レーヌ作品展覧會」

この展覧会は、1934年12月21日から23日まで、東京銀座の画廊青樹社で開催されたものだ。実はこの展覧会の開催には、1921年から1939年までの18年間、駐日ベルギー大使を務めたアルベール・ド・バッソンピエール（Albert de Bassompierre）男爵が関係している。この人物の記した「在日十八年—バッソンピエール大使回想録」⁴は、戦前の日本とベルギーの交流を知る上で非常に貴重な資料となっている。たいへんな親日家で、皇族、政治家、財界人や文化人との交流も幅広かった彼は、回想録の中で次のように述べている。「ずい分努力したにも拘らず私は、ベルギー絵画の展覧会を日本で開催してみたら面白いということをベルギーの関係者に納得させることができなかった」と前置きしながら、「それでも一九二四年、わが国の一団の芸術家が絵画、彫刻、デッサンを、前年九月一日の大震災の罹災者に対する日本の救済委員会あてに送ってきた。これらの作品は東京に展示されて大成功をおさめ、すべて、いい値段で売りつくされた。皇室も幾つかお買上げになったのである。」⁵これは前述した「白耳義國作家寄贈繪畫展覽會」のことを指しているのだが、バッソンピエールがベルギー美術の日本への紹介に強い関心を抱いていたことがうかがえる。そしてこの文章の後に、ヴァン・ド・レーヌについてこのように書かれている。

「一方私は、一九二九年の休暇の帰り、ヴァン・ド・レーヌのいくつかの作品をもち帰った。私は個人的にこの画家を知っていた。彼は日本の芸術に関心を抱いていた。私は彼のために東京で個展を開いた。その絵の半分以上が日本人や外国の愛好家によって買われた。文芸愛好家ハンター氏の如きは、一日に四枚も買ったのである！」⁶。

² 大熊敏之「白耳義國作家寄贈繪畫展覽會始末—一九二〇年代の日本の洋画壇と近代ベルギー絵画」『三の丸尚蔵館年報第二号』1995年、宮内庁。同展に関しては、この論文を参照した。

³ 大熊前掲書。富田章「日本におけるベルギー近代美術紹介」『サントリー美術館 サントリーミュージアム [天保山] 合同研究紀要 二〇〇九（第二号）』サントリー美術館、2009年。

⁴ アルベール・バッソンピエール著、磯見辰典訳「在日十八年—バッソンピエール大使回想録」1972年、鹿島研究所出版会。

⁵ バッソンピエール前掲書 p. 247。

⁶ バッソンピエール前掲書 p. 247。

ここで述べられている個展こそが、「ヴァン・ド・レーヌ作品展覧會」なのだが、この短い文章により、なぜ著名な他のベルギーの作家でなく、ヴァン・ド・レーヌの個展が日本で開催されたかの理由、つまり大使とこの画家の個人的な関係が理由であったことが明かされている。

ちなみに、「ハンター氏」とは、日本人と英国人の間に生まれた実業家ハンス・ハンター (Hans Hunter)、日本名範多範三郎のことで、東京アングリング・アンド・カンツリークラブで要職を務め⁷、バツソンプィエールとはこの鱒釣りクラブでの活動を通して懇意であった⁸。しかし、ハンターの購入した作品は、彼の死後全て処分されてしまったようである⁹。

次に、この「ヴァン・ド・レーヌ作品展覧會」を、発行された目録 (図2)¹⁰により、詳細を確認していきたい。表紙を開いて、扉 (図3) には展覧会の情報が書かれるが、これによるとこの作家の肩書が「ベルギー國美術院會員」とある。

さらに、次ページには、有島生馬による解説が掲載されている。内容を以下の通りに引用する。

白耳義大使バツソンプィエール男から或る日、ジュール・ヴァン・ド・レーヌの個展を日本で開催したいがといふ相談を受けた。レーヌは大使の舊友であり、又その賞賛的である同國の重要な畫家である。私もその作品は古くから同大使館で見た事があるので一考の上、個展の主催を青樹社の鈴木君に一任するのが最上の方法であらうといふ事を進言し、その運をとつた。

レーヌは同國の首都所在縣であるブラバン縣で小官吏を父として生れ、幼にして描くことに興味をもち、イクセルの學校でデッサンを初めた。次いでブルクセルのアカデミイでモンタルの指導を受け、主として水彩畫を描いてゐたが、それだけに満足出來ず、油畫に轉じ、その特質使途に大成するに至つた。別にエッチングの制作に確實な手腕を持つてゐる。又その畫材は人物、風景、室内、靜物、構想畫、そ



図2

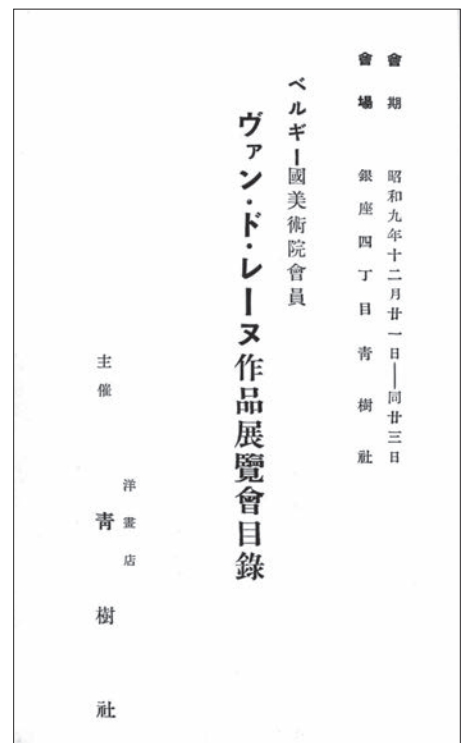


図3

⁷ 福田和美「日光鱒釣紳士物語」1999年、山と溪谷社。

⁸ バツソンプィエール前掲書 p. 220。

⁹ 福田前掲書 pp. 236-237。

¹⁰ 「ヴァン・ド・レーヌ作品展覧會目録」青樹社、1934年。

の何れをも自由に描く。殊に、フラマン、オランダの風物や、人物にその地方色を出してゐる點を注意して見て頂き度い。

現代白耳義の畫壇には大體三つに分け得畫派がある。グルー、ブラークレール、ステヴァンスの如き、クルバーからマネ時代と相通づる寫實派。ウイルト、フレデリック、アンソル、ロツプスの如き、浪漫的な抽象畫派。及びヴキツマン、クロースの如き印象風な自然派の作家群である。でレーヌはこの最初の括内に入るべき作家であり、嚴格に近代油繪の傳統、手法を墨守し、使驅に於いて十分の熟練を見せてゐる。

美装された富豪の客間などにレーヌの作品二三が飾られるとしたら、必ず調和的であらうと思ふのである。

昭和九年十二月

於 番町
有島生馬

有島は、展覽会開催までの経緯、この作家の略歴、ベルギー画壇における位置づけを解説している。

有島とバツソンプיעールは近所に住む友人同士であったのだが、その二人の関係を物語る一枚の油彩画が、東京の復興記念館に所蔵されている(図4)¹¹。バツソンプיעール自身も被災し大きな衝撃を受けた関東大震災の後

に、犠牲者を悼む絵画が有島により制作された。そこには、当時の首相、山本海軍大将が軍服姿で被災地の廢墟の中にたたずみ、その横に幼い少女とともにいる西洋人の男性がいる(図5)。バツソンプיעールによれば、この二人のモデルは、バツソンプיעールと有島の姪なのだが、この画中の人物は自分には似ていないという。というのも、これはバツソンプיעールが震災後に母国ベルギーに積極的に呼びかけて、多額の義捐金を日本に送らせたことの貢献を、「日本に対する外国の援助」を象徴するために寓意的に表したものだからだという。

そして有島は、この文中でヴァン・ド・レーヌの作品を大使館で目にしていただけと語っており、これは先に引用したバツソンプיעールの回想にもある、1929年にベルギーから持ち帰ったこの画家の作品と思われる。



図4



図5

¹¹ この作品に関しては、バツソンプיעール前掲書 pp. 96-97による。

有島が青樹社を選んだのは、彼が1929年6月29日から7月3日までここで個展を開催しており、付き合いがあったからであろう¹²⁾。鈴木里一郎が経営していたこの画廊は、これまで絵画の販売といえば受託販売だけであったものを、買取り制度を導入して洋画の市価を確立した、洋画商の草分けとなった画廊である。青樹社については再度取り上げる。

そして有島によって紹介されるヴァン・ド・レーヌの略歴であるが、先に取り上げたベルギーの美術家事典にあるこの作家の記述と大筋ではほぼ一致しており、バツソンプיעールが画家本人から確認して有島に伝えたものと思われる。

興味深いのが、有島による当時のベルギー美術の「写実派」、「浪漫的抽象画派」、「自然派」の三分類である。「写実派」と「自然派」は今日においてもこの分類に一定の説得力を感じるが、ウィールツ、フレデリック、アンソール、ロップスを「浪漫的抽象画派」とし、これら具象の画家を抽象画ととらえている点が面白い。今日からすれば、「幻想的象徴派」であろうか。

最後に、有島はヴァン・ド・レーヌの作品を、美装された富豪の客間にふさわしいと評しているが、これは実際に彼の作品に静物の小品が多いことから、適切な評に思われる。

「ヴァン・ド・レーヌ作品展覧會」目録に話を戻そう。目録の次のページには、ヴァン・ド・レーヌの肖像写真（図6）を掲載している。これに続いて、展覧會の主催者である青樹社の鈴木里一郎による挨拶文があるので、以下に引用したい。

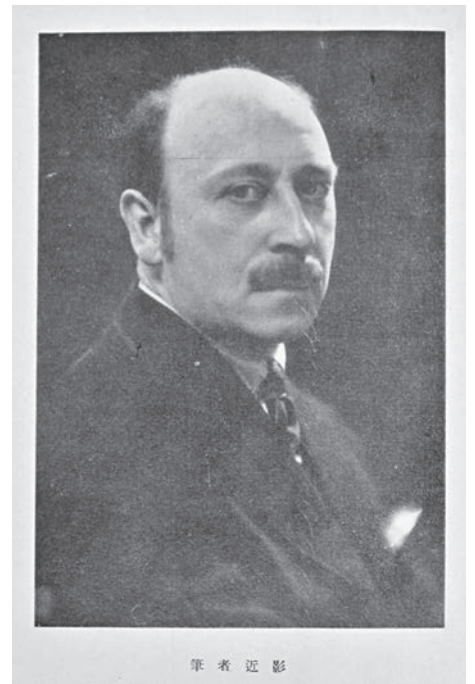


図6

今回白耳義大使バツソンプיעール男爵閣下の懇望に依り、同國美術院會員ヴァン・ド・レーヌ畫伯の作品展覧會を開催すること、なりました。

吾國には佛國を始め英國、和蘭の美術は屢々將來されて居りますが、白耳義國の繪畫は大震災當時白耳義現代美術の綜合大展覧會が開かれて非常に好評を博し、其の賣上金全部を義捐金として日本政府に寄附したことがあるのみで、個人展覧會は今回をもって嚆矢といたします。

ヴァン・ド・レーヌ畫伯の作品は洗練された色彩と達者な筆致で描かれ、而して「白耳義情緒に富んだ風景畫を始め静物、人物等約百點で、必ずや吾國愛好家の賞賛を博するものと信じます。白耳義大使閣下も之を契機として、將來日本に於て白耳義美術展覧會が毎年開催せられ、美術を通じて日白兩國の親善に資したいと強調して居られます。希くば大方各位の多大なる御後援の下に本展覧會を成功せしめられんことを祈って止まない次第であります。

於 青樹社樓上
鈴木里一郎

鈴木木文章にも、「白耳義國作家寄贈繪畫展覧會」の成功が言及されており、またこのヴァン・ド・

¹²⁾ 中島理壽「関東の洋画商—西田武雄・石原龍一・鈴木里一郎・長谷川仁・佐藤次郎・西川武郎・川邊敏哉」『日本洋画商史』日本洋画商協同組合編、1994年、p. 340。

レーヌの個展が、日本におけるベルギーの画家の最初の個展であるとしている。出品点数を約100点としているが、巻末の目録に掲載されている作品数は83点となっている。

そして続くページには、出品数83点のうち、17点の作品の図版を、巻末には全作品の出品目録を掲載している。以下に目録の内容を記載する。(数字はギリシャ数字に変更したがそれ以外の表記はそのまま転記した。図版のあるものには★印をつけた。)

陳列目録

- 1 ラ・コモード・アンピール (アンピール型筆筒)
- 2 オスタンド港の日暮
- 3 夜の阿姆斯特ダム
- 4 工匠★
- 5 ブリュージュ市の冬
- 6 ブリュージュ市のノートルダム聖堂内の祭壇★
- 7 静物
- 8 日中の小路 (ブリュージュ市)
- 9 日中の鐘楼 (ブリュージュ市)
- 10 爐を消して (ブリュージュ市の小路)
- 11 バクスの噴水 (佛國ヴェルサイユ)
- 12 罌粟の花
- 13 日向の牡丹★
- 14 マムシ草
- 15 フレミツシュ人の室内
- 16 オスタンドの港
- 17 けしの花
- 18 黄薔薇
- 19 村の夜★
- 20 オスタンドの漁夫姿★
- 21 牡丹
- 22 フラマン橋 (ブリュージュ市)
- 23 オーグスタン橋 (ブリュージュ市)
- 24 ブリュージュメネトリエー河岸 (曇つた日) ★
- 25 ブリュージュメネトリエー河岸 (太陽に照らされた日)
- 26 麵麩屋 (ブリュージュ市) ★
- 27 日中の路傍 (ブリュージュ市)
- 28 研師 (ブリュージュ市)
- 29 ノートルダム寺院内の白大支柱 (ブリュージュ市)
- 30 マレシャル門 (曇つた日のブリュージュ市)
- 31 マレシャル門 (晴れた日のブリュージュ市)
- 32 ノートルダム聖堂内 (ブリュージュ市)
- 33 日光を浴びたノートルダム聖堂内祭壇
- 34 日光を受けたる玄関
- 35 和蘭の召使い女

- 36 大理石の玄関
- 37 和蘭人住家の内部
- 38 白國ユキ市の古橋
- 39 ブラバン風景★
- 40 オスタンド海濱午後
- 41 ムーズ川に面したユキ町
- 42 ブリュージュ修道院の入口
- 43 悲劇の岩山★
- 44 山麓の基督十字架像★
- 45 御最後の岩山★
- 46 オスタンド港のパノラマ★
- 47 日中のオスタンド港
- 48 ブリュージュ市の秋
- 49 ブリュージュのボンフラマン（フラマン門）
- 50 ムーズ河秋の夜景★
- 51 フレミツシュの邑
- 52 ブリュージュ市の冬
- 53 フランタースの運河
- 54 曇つた日のオスタンド港★
- 55 クルトレー市の修道院
- 56 和蘭ハーレン市の寺院内部
- 57 修道院の一角（クルトレー市）
- 58 裸體
- 59 ブリュージュ修道院日中
- 60 街景
- 61 ムーズの風景
- 62 裸體女稿圖
- 63 裸體女稿圖
- 64 鐵道の徠事者（木炭畫）★
- 65 裸體（木炭畫）
- 66 風景（毛筆にてデッサン）★
- 67 石臼（木炭にてデッサン）
- 68 ウキの町（木炭畫）
- 69 ウキの古城（木炭畫）
- 70 倦怠
- 71 操り人形を持つ女
- 72 裸體（木炭畫）
- 73 笑ふ女（木炭畫）
- 74 謎（木炭畫）
- 75 疲れ（木炭畫）
- 76 座したる裸婦（木炭畫）
- 77 弦樂器を作る人（エツチング）

- 78 ムーズ河に面したウキの町 (同)
- 79 ガン市の冬 (同)
- 80 フランダーの墓地 (同) ★
- 81 和蘭人の一室内 (同)
- 82 茅屋 (同)
- 83 ポン・オーグスチン (ブリュージュ市) (同)

掲載された図版のうち、幾つか興味深いものを取り上げてこの作家の作風を確認したい。例えばNo. 13の「日向の牡丹」(図7)はこの作家に特徴的な静物画である。No. 19の「村の夜」は、表紙(図2)に用いられている作品で、風景画は他にもNo. 54



図7

「曇った日のオスタンド港」(図8)や、似たものでNo. 46「オスタンド港のパノラマ」のような作品があり、平面的な幅広のタッチが印象的で、叙情的な雰囲気満ちている。有島が述べた「美装された富豪の客間」にふさわしいようなこうした静物画や風景画の中にあって異彩を放つのが、No. 20「オスタンドの漁夫姿」(図9)やNo. 64「鐵道の徠事者」のような労働者を描いた作品だ。しかし彼がブリュッセル王立美術アカデミーで、炭坑労働者を数多く描いたことで知られるムーニエに学んだことを考えれば、こうした画題を好んだことも頷ける。そして同じように労働者を描いているNo. 4の「工匠」(図10)だが、画面左側にあると思われる窓から差し込む光に照らされた人物像には、影響を受けたとされるフェルメールなどのオランダ絵画を思わせる。

この一見穏健で保守的な作家は、近代ベルギー美術の中でどのように位置づけられるのであろうか。作家の活躍した時代を考えると、19世紀末に生まれて、20世紀に活躍したことになるのだが、ブリュッセル王立美術アカデミーでモンタルドに学んだ同時代の画家たちといえば、ルネ・マグリットやポール・デルヴォーが挙げられる。20世紀ベルギー美術において、これらの作家のような前衛的なシュルレアリスムに向かう画家もいれば、このヴァン・ド・レーヌのようないわば伝統的な作風を守る画家もいたということになる。しかしこのヴァン・ド・レーヌにおいても、上述したようにブルジョア好み



図8



図9

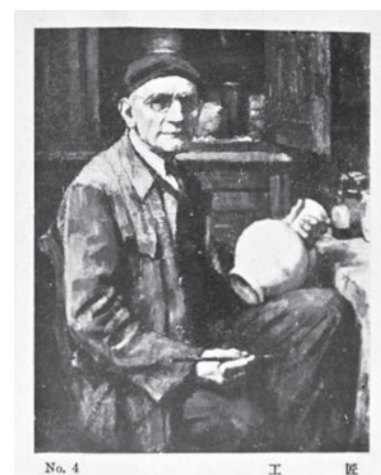


図10

の作品を描く一方で、ムーニエ風の社会主義リアリスム的な作品も制作しており、一人の作家の中に多様な側面が共存していることが分かる。

③「青樹社蒐集・欧州繪畫展覽會」

1936（昭和11）年3月25日から4月1日まで、「ヴァン・ド・レーヌ作品展覽會」と同じく青樹社主催で、東京上野の日本美術協会で、「青樹社蒐集・欧州繪畫展覽會」（図11）が開催される。青樹社¹³については前述した通り、洋画を買取りで販売する洋画商の草分けなのだが、この画廊が経営的に最盛期を迎えたのがこの1934年から36年頃である。関東大震災で壊滅した東京の街を目の当たりにし、復興に伴い洋風建築が増えることを予見し洋画商を始めたという経営者の鈴木は、顧客の好みそうな作品のみを買取りして販売することで資金を獲得し、特に1934年に松方コレクションの売立ての独占権を得たことで、その成功は決定的なものとなる。そしてこの画廊の事業の頂点ともいえるのが、この1936年の展覽会である。これは、鈴木自身が、パリ在住の岡鹿之助と鈴木龍一の協力により、1935年に渡欧し、「パリ、ロンドン、ベルリン、ミュンヘン、ブリュッセル、及ローマ等」で買い付けた「仏、英、和、伊、白、独の各画派に亘って、主として有名大家」の作品を、「現存大家の作は、大部分直接アトリエより、また物故作家のものは二三の蒐集家と大画商より購入した」と、この展覽会の目録の序文で述べている¹⁴。

この展覽会にも、ヴァン・ド・レーヌの作品が2点、No. 124「ダリア」（図12）とNo. 125「フラマンド村」（図13）が出品されている。見開きページの半分に図版が、残り半分に作品名と作家の略歴が掲載されているが、略歴に関しては1934年のヴァン・ド・レーヌの個展の際に掲載されたものとほぼ同じ内容になっている。

ところで、この展覽会にはこのヴァン・ド・レーヌ以外にも、ベルギーの作品が出展されていたので、以下の通りに紹介したい。

No. 25 「風（景色）」 クレーズ（Louis Clesse）

図14 1889年ブルッセルに生れ、イクセル美術學校に學ぶ。白耳義王立美術院會員にして、風景特に海岸風景畫家として重きをなす。

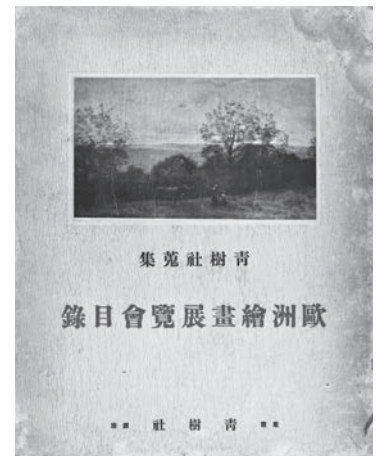


図11



図12



図13

¹³ 青樹社については、中島前掲書 pp. 338-348を参照した。

¹⁴ 鈴木里一郎「青樹社蒐集・欧州繪畫展覽會目録」青樹社、1936年。

人格高潔、清廉、稀に見る好畫家である。
其作品は白耳義各地の美術館に入つて居る。

没年が記載されないが、ベルギーの美術家事典¹⁵によれば、この作家の没年は1966年とある。

No. 26 「漁師」 クレーズ (Louis Clesse)

図15 彼の最も好んで描く海岸風景を背景として、漁師の姿を寫したものである。



図14

No. 74 「丘にて」 モーレンハーウ (Joseff J. Moerenhout) (1801-1875)

図16 フランドル派の風景畫家にして、冬の景色や牛の居る景色を得意とした。1801年アントワープ郊外に生れ、ホレス・ヴワナーの門下生となつて畫業を習得した。彼の代表作はミュンヘンの美術館に在る。1875年死亡。



図15

正しい綴りは、Josephus Jodocus Moerenhoutと思われる。ホレス・ヴワナーの門下とあるが、これは H. Vernet のことと思われる¹⁶。

No. 128 「風景」 ヴェル・ハイデン (Ver Heyden) (1845-1905)

図17 十九世紀の白耳義風景畫家にして、1845年ブルツセルに生れ、イクセル美術學校に學ぶ。吼々として畫業に精進し、當時のフラマン派中の重鎮たり。其の代表作はブルツセルの白耳義博物館にある。



図16

この作家に関しては、姓のみで名が無いのだが、生没年他の情報からおそらく Isidore Verheyden と思われる。その場合、ベルギーの美術家事典¹⁷によれば、生年と生地は1846年アントワープ生まれで、イクセルではなく、ブリュッセルの王立アカデミーで学んだとある。



図17

¹⁵ 前掲書 *Le dictionnaire des peintres Belges du XIV^e siècle à nos jours*, Vol. 1, p. 183.

¹⁶ 前掲書 *Le dictionnaire des peintres Belges du XIV^e siècle à nos jours*, Vol. 2, p. 749.

¹⁷ 前掲書 *Le dictionnaire des peintres Belges du XIV^e siècle à nos jours*, Vol. 2, p. 1150.

No. 131 「ベルギーの小路」 ヴェキギン (Edouard de Vigne) (1808-1866)

十九世紀の風景画家にして、またエッチングをよくした。1808年アントワープに生れ、アントワープ美術学校に学んだが、後デ・パルスゲルガーの門下に入り画家となった。1834年イタリー留学奨励金を獲得し、イタリーで数年間勉強した。1841年には英國にも旅行して作畫に務めた。

名の綴りは Edouard、姓の読みはヴィーニユカ。デ・パルスゲルガーとは De Volsberghe と思われる¹⁸⁾



図18

3. ヴァン・ド・レーヌ「牡丹」の来歴

この度作品を調査した、ヴァン・ド・レーヌ「牡丹」(図1)はどのような経緯で、現在の所蔵者の手に渡ったのだろうか。

この作品の裏面(図19)には、2枚のラベルが貼られている。上のラベルには「6 Pivines」とフランス語で「牡丹」とかかれ、下のラベルには「No. 38 作者 ヴァン・ド・レーヌ 畫題 牡丹 洋畫店 青樹社 東京銀座」とある。

このタイトルからすれば、この作品は、目録に写真が無いものの、1934年の「ヴァン・ド・レーヌ作品展覧會」の目録 No. 21の「牡丹」と思われる。しかし番号が異なるのはなぜなのか。先述したバツソンピエールの回想によれば、この展覧会で半分以上の作品が売れたとある。つまり、半分弱の作品がこの時売れ残ったことになる。

ところで、ご所蔵者の大島氏によれば、この作品は当時関西に住んでおられた大島氏の父上が、大阪の百貨店で買い求めたものであるという。

青樹社であるが、前述したようにこの「ヴァン・ド・レーヌ展」の開催された1934年から「青樹社蒐集・歐州繪畫展覧會」の開催された1936年が絶頂期で、前述した1936年「青樹社蒐集・歐州繪畫展覧會」は、3月25日から4月1日の東京会場の後、4月10日から16日まで、大阪の阪急百貨店に巡回した¹⁹⁾。さらに、1939年には青樹社は大阪の御堂筋ガスビル北に大阪支店を出店するのである。残念ながら、この「歐州繪畫展覧會」の大阪会場での目録が手許にないので、この「牡丹」がこの大阪での展覧会に出品されていたかどうかは分からないのだが、おそらく1934年の東京での「歐州



図19

¹⁸⁾ 前掲書 *Le dictionnaire des peintres Belges du XIV^e siècle à nos jours*, Vol. 1, p. 364.

¹⁹⁾ 増田洋「京阪神地方における昭和初年の西洋美術の実態」、前掲書『日本洋画商史』p.443、大河内菊雄「関西の洋画商—浜田長彦・森川喜助・山本源之助・大塚銀次郎・花房静也」、前掲書『日本洋画商史』pp. 415-416。

繪畫展覧會」で売れ残ったこの「牡丹」が、青樹社により大阪で販売されて、大島氏の父上の手に渡ったものと思われる。No. 38という番号は、大阪でつけられたものと推測される。

4. バッソンピエールによるベルギーの作家の日本での紹介

上述した「ヴァン・ド・レーヌ作品展覧會」の目録の冒頭で鈴木は、この展覧会が日本におけるベルギーの作家の最初の個展であると言及しているが、少なくとも戦前、ヴァン・ド・レーヌ以外の作家で日本で個展の開かれた作家は他にはいないのだろうか。バッソンピエールの回想録に、次のような気になる文章がある。

「一九三七年の初め、ベルギーの細密画家コルフスが来た。彼は日本人幾人かの肖像画を描いたが、その中には三井男爵とその家族のものもあった。私たちは彼を日本の人々に知ってもらおうと、彼の以前の作品の展示会を前もって大使館で開いておいたのである。コルフス氏は一年ほど日本に滞在した。」²⁰

日本に一年間も滞在したというこのコルフスはどのような画家なのだろうか。ベルギーの美術家事典を見ても、この作家と思しき作家名を探すことはできなかった。唯一、インターネットで、この作家と思われる人物を紹介する、アメリカの細密画を紹介するウェブサイト²¹を見つけることができたのみである。それによると、この作家は Albert Louis Colfs (アルベール・ルイ・コルフス)で、1899年生まれで、没年は不詳、ベルギーの画家で、アメリカで制作をしていたという。細密肖像画の画家で、アメリカに渡った以外に、日本や中国にも滞在していたという。1935年と1948年に、ニューヨークに船で入国しているという。

上記のバッソンピエールの記述、細密画家で肖像を描くこと、来日していること、生年や活動年からも、恐らくコルフスとはこのアルベール・ルイ・コルフスと思われる。バッソンピエールは彼のために大使館で個展を開催する労をとったものの、当時は分からないが、少なくとも現在はベルギーにおいてすら忘れられた作家になってしまっているようだ。三井男爵とその家族の肖像画を描いたとあるので、三井記念美術館に確認をしたのだが、少なくとも現在この美術館の所蔵品にはなっていないという。

5. 結語

ヴァン・ド・レーヌという戦前の日本で初めて個展の開催されたベルギーの作家と、併せて当時日本で写真図版ではなく実作品の紹介された幾人かの作家の例を本論では取り上げたのだが、幾つか興味深い点に気付かされる。

まずはこれらの作家たちの中には、現在の我々がベルギーの20世紀前後の近代美術の代表的な作家だと見做す、例えば象徴派のフェルナン・クノップフや、シュルレアリスムのマグリットやデルヴォーといった作家、もしくは20人会に名を連ねるような作家たちの名が一切含まれないということである。逆にヴァン・ド・レーヌのような作家たちは、当時の外交の関係者や画商にとっては人気作家であったのだが、現在においては日本においてもベルギーにおいても、その名が忘れられて

²⁰ バッソンピエール前掲書 pp. 246-247。

²¹ <http://american-miniatures2.blogspot.jp/2006/04/colfs-albert-portraits-of-man-and-lady.html>

しまっている。

これは概して、前衛といわれる作家たちは当時としては評価が低く主流とは見做されないものの、時間の経過とともに歴史的評価を獲得して主流へとその評価が転換されてゆく現象が起これ、ヴァン・ド・レーヌのような当時の人気作家にはその逆の現象が起こるということを物語っている。

しかし、このことは決してヴァン・ド・レーヌのような作家の作品の質や価値が低いということではない。作品の評価とは総じて時代の流れの中で相対的に決まってゆくものでしかないからだ。むしろここで強調したいのは、ヴァン・ド・レーヌのような作家の作品もまた、近代ベルギー美術を構成する重要な一つのファクターであり、これを知らずしては近代ベルギー美術の理解はなしえないということである。

(やまだまきこ 当館学芸員)

朝見香城の画業について

平瀬 礼太

姫路市立美術館では朝見香城（あさみ こうじょう）による「農村風景」（1947～48年 二曲一
双屏風）「白鷺城」（1954年）の2点を所蔵している。本稿では、香城の画業について現在判明して
いることを簡単に纏めてみたいと思う。

1 初期

香城は1890（明治23）年に兵庫県飾西郡青山村に生まれている。現在の姫路市青山であり、当館
にとっては郷土ゆかりの作家である。本名は寅次郎といった。父の清五郎は梅香と号して俳諧を嗜
んでいた。

当時青山には藤岡了空という僧がいた。了空は蓬髪で仏教、儒教に通じ、「心既に俗世を離れて、
身は唯百丈の塵煤に埋る。室掃はず、髪梳らず、而も吐けば即ち警世済生の語を為す」と姫路で発
行されていた『鷺城新聞』は評している。香城ははじめ、近所に住んでおり、父とも知己のあった
了空に画と漢学の手ほどきを受けたという。後に香城が記したところによれば、「あいまいな返事、
言葉を口にするな。必ずやるのだ。やりますという言葉以外は使うな」という了空の言葉が後々ま
で心に刻み込まれ、心の一つの柱となったという。了空は香城の最初の絵の先生であったというよ
りも、精神面を育ててくれた大事な師であったということであろう。

続いて香城は姫路市の北東、加東郡社町（現加東市社町）出身で、1905（明治38）年より竹内栖
鳳の画塾・竹杖会に入っていた日本画家の森月城（1887－1961）を頼って京都に出る。1908年（明
治41）年頃のことという。3歳年長の月城とはその後も親交を結んでいた。

ところで、1904年からは日露戦争が始まるが、香城は徴兵検査を受けたそうである。体格の良い
香城はすぐに検査官に甲種合格とされたというが、趣味を尋ねられて黙って紙に燕の絵を4枚描い
て手渡すと、検査官は暫らくその絵を眺めて、乙種合格へと変更したというエピソードがある。
1912（明治45・大正1）年頃に東京へ行こうと思って気が変わって名古屋で途中下車をしたという。
また実際は東京に行って佐々木月樵に世話になったが、脚気を患って帰郷したとも伝えられる。と
もかくも名古屋に住み着くことになった。名古屋では水谷芳年（1879－1928）に師事することとな
った。芳年は名古屋生まれの日本画家で、中島有年に岸派の画法を、石河有鄰に南北合法を学んで平
素は山本梅逸を崇拜していた。花鳥画を得意とした。

1915（大正4）年、香城は第9回文展に「陶器窯図」（写真1）を出品して初入選した。翌年から
は京都の西山翠嶂（1879－1958）に師事している。翠嶂は竹内栖鳳門下で、京都市立美術工芸学校
出身の日本画家であるが、後進の指導にも熱心で、1921年に画塾青甲社を開き、京都の有力な画塾
の一つとなるまで成長させた。香城も設立当初より青甲社の塾員となっている。もの静かで門弟へ
の暖かいいたわりが肌を感じられたと、香城は翠嶂のことを回想している。

1915年からは東海美術協会展の審査員も務めるようになり、1944年まで継続して審査を担当し
た。

1920年4月に名古屋美術倶楽部で個展を開催した。初の個展ではなかろうか。作品集が合わせて
刊行され、81点の作品が掲載されている。全て絹本で二尺五寸から一尺五寸ほどのサイズが並び、
対幅や四幅対、尺八横物も含まれていた。図版のみで即断はできないが、諸派の画法を学んだ様子
が伺えるとともに、琳派のような装飾的効果に配慮した部分が見受けられるのは興味深い。画題

も花鳥動物、風景、城などヴァリエティに富んでおり、人物でも出身の播磨ゆかりの大石良雄から寒山拾得や唐美人のような中国の人物像まで描いている。満30歳になる直前のことであるが、この頃には様々な画技もある程度修め、意欲的な創作を行っていたことが見て取れる（写真2～7）。

この年には香風会も結成した。毎年夏に塾生の作品を公開する展覧会を開催し、15回展まで開催している。1920年秋には第2回帝展に「雨に煙れる琴平」を出品した。その後も官展に度々入選している。

1921年になって中国に渡り、長江を南京から漢口まで船旅をしたときに、船内で話しかけられたのが芥川龍之介であったそうだ。

はじめは中区南伊勢町に住んでいたが、1926年に千種区鍋屋上野に家を新築して、漢学者の服部擔風に「松籟荘」と命名してもらったという。

2 1920年代後半～戦中

帝展にも連続して入選し、各地で個展を開催、自ら主宰する画塾の活動も順調なようで、愛知の中堅作家として地位を築いた時期である。渡辺幾春、喜多村麦子らとともに中京美術院を創設したのは1928年頃のこと。すっかり名古屋に腰を落ち着けている。1928年秋に実施された御大典記念名古屋博覧会にも出品した。

1933年に『芸美』という美術雑誌のアンケートで、敬服する画家として小林古徑、村上華岳、富田溪仙を挙げているのも興味深い。それぞれ個性の異なる3人を選んだ当時の香城の心持がわかるようである。この5年後に発刊した『香城画集』の序文（章末に掲載）には、作品が時代の変遷と自分の心境の推移に影響され、時により写実へ、時に古画憧憬へと移り変わっていることを香城自らが意識していたことを記しているが、まだこの頃は古徑、華岳、溪仙などそれぞれに美点を見出し、古画からもインスピレーションを得ながら、自らのスタイルを模索する段階であったのであろう。

1940年夏には南洋諸島に赴いている。事の詳細はわからないが、軍部から地上のものは一切写してはならぬと言われたそうで、海のものばかり描き、目的を達せられなかったというが、良い体験にはなったようだ。翌年には「朝見香城氏南洋土産展」を開催している。あまり珍奇な画題を扱わない、オーソドックスな取材による作画を行っていた香城であるが、同展に出品した「スクール」「カヌー」「ウラカス火山」や1943年の『香城画集』に掲載された「南燕」「南溟秘底」「常夏」（これらも南洋土産展に出品したと思われる）などは香城にしては異色の内容であり、明らかに南洋諸島の体験によるものである。香城の別の側面を表して面白。

戦争中は青甲社の一員として献納作品の制作にも従事する。1943年の『香城画集』にも香城なりの彩管による報国の念が表出されているが、個人的には天台宗の僧で青蓮院第四十六代、四天王寺管長を務めた田村徳海に法印を授かったことは重要な転機であったのではないだろうか。

参考

※『香城画集』（1938年11月）の序文

過去拾幾年公の展覧会に発表した自作を顧みます時、そこに時代の変遷と芸術に対する心境の推移を痛感いたします。それにも増して平素の作には時と所の大なる影響により或時は写実に偏し或は古画に憧憬し幾轉變、今日に至りました

個展出品作は私の平日ありのまゝの製作相を見ていたゞきたい念願から昨春催しまして第二回を本春精進したものでありまして申上げるまでもなく私の座右の游心録ともまたは身辺随感小集にも等しきものゝみにて唯だ迥として稟機に遠く遅々として状き難き徑を静に歩むでゐる自分の全影かとも存じます

恠うした自分の所産を一纏めに綴つて見ることに虚しきことながらやはり自作に対する愛着としてひとすぢの悦びに浸されます
謹んで心恵き諸彦に捧げる所以であります

※『香城画集』（1943年11月）の序文

大詔を奉戴する我ら画人の途自ら既に定まる。

皇恩の深高に感泣し皇国画人の自覚に徹し、丹心もつて彩管報国の念にやむ時あるなし。

それ画品は人格の反映なり。日夜研磨して倦むべからず。

予 さきに立願し田村徳海師に参じ鈍根漸く許されて法印を授かる。これ克己錬成をもつて人格陶冶に努めんが故に他ならざるも、沈思三省つねに及ばざるを愧ぶ。茲に蒐むる画影は即ち法印号を授かりてより後の作品を主とし、既刊三冊に継ぐと雖も、自ら潜かに劃別を期せり。願はくば批判の鞭を加へ給はらんことを。

昭和十八年十二月八日大詔奉戴第三周年に

松籟荘にて
朝見香城
自ら序す

3 戦後の活動

戦後も名古屋を拠点に活動を続けている。ただし、戦後すぐの活動として目立つのは、1946年に戦災からの復興の象徴として開催された郷里姫路市における第1回姫路市展への招待出品である。以後毎年開催された同展に1963年の第18回展まで毎回作品を出品している。やはり姫路に対しては特別の思いがあったということであろうか。姫路城を描いた作品も度々制作して発表している。

毎年ということではないが、日展にも出品を続け、戦前以来の青甲社展にも続けて出品をしたようだ。戦後間もなく且々会、次いで且交会を組織して、一般の日本画愛好者への指導も行っている。参議院議員の草葉隆圓や名古屋市長の杉戸清など政財界の名士にも教え子やファンが多かった。

1950年には愛知県文化功労賞を受け、1954年からは自宅を画塾として開放して子供たちにも指導を行っている。名古屋における後進の指導という意味では、市野亨、渡会伊良子、臼杵一穂、河本正、森田沙伊などを育てた功績も大きいといえるであろう。

1960年には青年時代、京都に出るときに頼った森月城と双城展（月「城」と香「城」）を開催しているが、同じ播磨出身のよしみであろうか、50年以上の付き合いとなる。

節目ごとに個展を開催していた香城は、喜寿の個展に際して発刊した画集の序文に次のように記している。

「序にかえて 朝見香城

去年、わたしは喜寿を迎えました。ほんとうはわたしは、喜寿だからとて、別段どうということはありませんでした。だが周辺の善意の人びとのおすすめで、その春、香城喜寿自祝記念画展を松坂屋画廊（名古屋）で開きました。

終わって、ほんとうに、ほっとしました。何だか画業六十余年歴に一ピリオドを打った思いがいたしたからです。ところが、自祝画展だけではお許しがでない。特に香城画塾の人たちの熱望はさまざまばかりで、ぜひ祝わせよと、いうので、画塾の且交会展を機に、その秋重ねて香城喜寿記念画展を丸栄画廊（名古屋）で開きました。

喜寿展の二つもりでした。いやめでたいことは何度お祝いしてもいいといってくれた人もいました。二度目には喜寿春秋記念展と銘うたれました。

こうしてわたしの、喜寿はすぎました。と思っていたところへ、あの時の画集を出版しろとのご要望で、なるほど、あれはわたしの画歴の一劃点だから、わたしだけの心の記念塔としてでも、と考へ、ここに自家版として印刷に付した次第です。

わたしは、わたしのこんにちまでを、ふりかえってみますと、もったいないほど、師恩に恵まれましたし、よき後援者に支えられてきました。其上森田沙伊画兄など、還暦、古稀、喜寿、とわざわざ遠路来場して、よろこんでくれました。

ただそれだけが忘れられないのです。では、どうしてそれに酬いるべきであるかと日夜苦慮いたしております。

それには、いい作品を残すこと以外にはございません。

精進に精進を重ね、“この一作”のために全精力を傾けねばなりません。

そう信じ、そう努めております。

どうぞ、お見守りください。

昭和四十二年七月吉日

(『喜寿記念画集』1967年7月 より)

精進を重ねていい作品を残すことのみと語る香城は、翌年にさらに記す。齢78のことである。

「苦しみ、希望、不安、それぞれが入り混って絵が生れる。自ら苦しみを味わって描き上げていくことにより、なかなか到達しえない美術の道に一步近づく」

「絵の場合も心で描くのです。描かずにはおられないで描いた絵、これが本当の絵であると思います」

「絵の裏面に作家の個性、生活、体験がにじみ出るような絵が真の絵といえましょう」

「芸術は勝負ではない。勝つ絵よりも自分自身が本当に精魂こめて描き上げていくことが画家としての本来の使命であると思うのです」

(いずれも「苦しみを耐えぬく心が真の絵を」『日経ジャーナル』1968年7月 より)。

香城の作品に表面的な苦難や暗さがあらわれるものはほとんどない。しかし自ら記すように、制作のために苦しみを味わって、描かずにはおられずに搾り出すように描き上げるがゆえに、苦しみが表面に出るのではなく、かえって穏やかで、時に華やかな、日本画独自の境地に達することができたのではないだろうか。

この6年後の1974年8月に香城は亡くなった。満84歳であった。



写真1 「陶器窯図」1915年 第9回文展



写真2 「老松孔雀」『香城作品集』（1920年）掲載

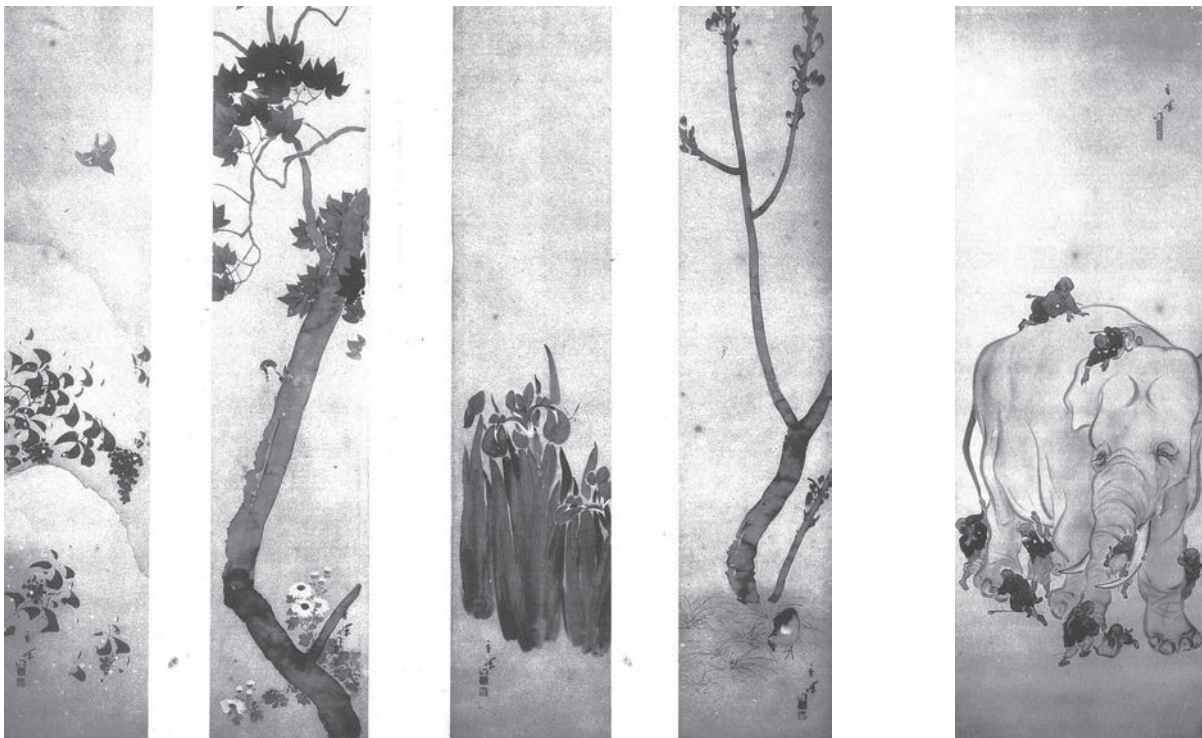


写真3 「四季花鳥」『香城作品集』（1920年）掲載

写真4 「盲群摸象」
『香城作品集』（1920年）掲載



写真5 「大石良雄」『香城作品集』（1920年）掲載



写真6 「虎溪三笑」『香城作品集』（1920年）掲載



写真7 「木蓮美人」『香城作品集』（1920年）掲載



写真8 「赤穂塩田図」1928年 第5回青甲社展

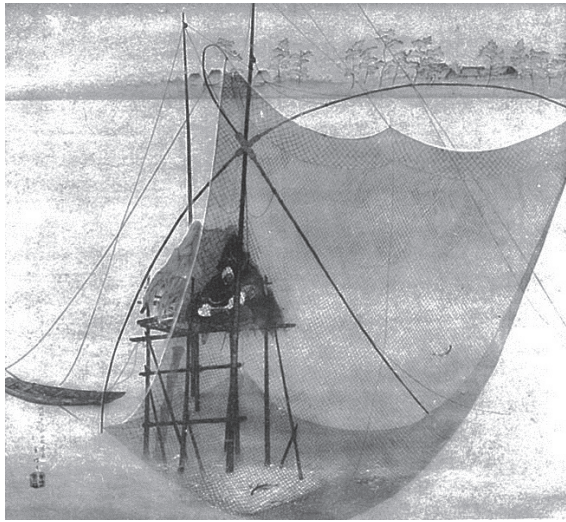


写真9 「短夜」1928年 御大典奉祝名古屋博覧会美術館出品



写真10 「庭濼」1932年 第9回青甲社展



写真11 「残月」『香城画集』(1938年)掲載

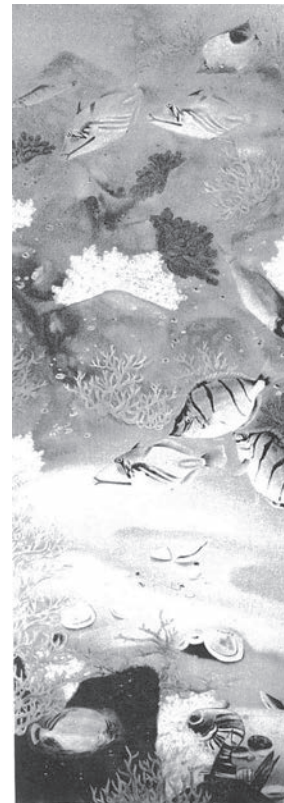


写真12 「南溟秘底」『香城画集』(1943年)掲載

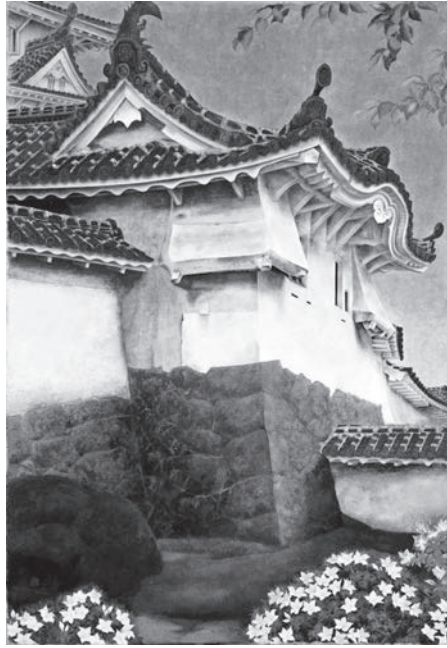


写真13 「白鷺城」1954年 第10回日展



写真14 「冬日」1958年 第32回青甲社展



写真15 朝見香城古稀日本画展（1959年）会場



写真16 「静浄」1959年 朝見香城古稀日本画展

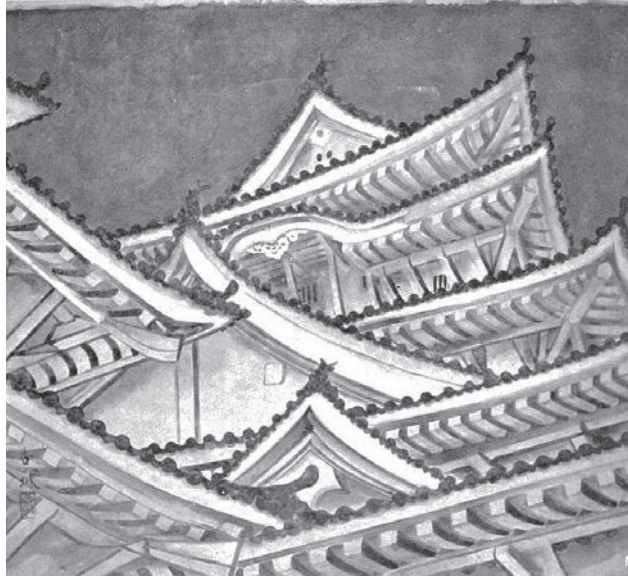


写真17 「夜明まへの城」1959年 朝見香城古稀日本画展



写真18 「五月頃」1966年 朝見香城喜寿記念展

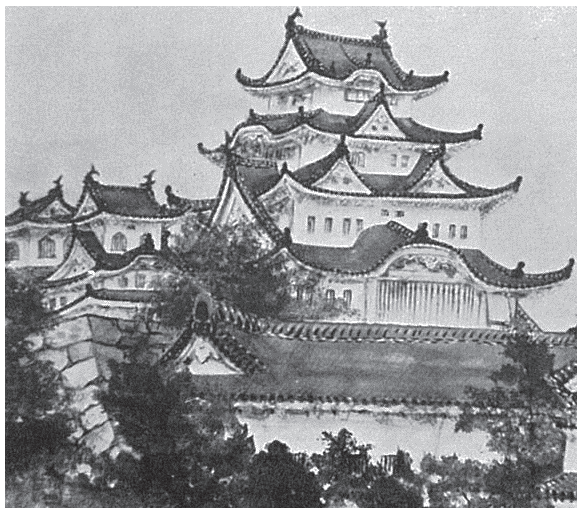


写真19 「姫路城」1966年 朝見香城喜寿記念展

朝見香城年譜

西暦	和暦	月	日	事 項
1890	明治23	5	6	兵庫県飾西郡青山村（現姫路市青山）に生まれる。本名寅次郎
1902	明治35	3		姫路市矢落尋常高等小学校卒業
1907	明治40			この頃父・清五郎の友人・藤岡了空和尚に絵を学ぶ。
1908	明治41			この頃森月城をたよって京都に出る
1912	大正元			この頃名古屋に出る。水谷芳年の弟子となる。中区南伊勢町に住む
1915	大正4	10	14	第9回文展（～11/14）に「陶器窯図」出品
1916	大正5			西山翠嶂に師事
				東海美術協会展審査員を委嘱される（～1944年）
1920	大正9	4	6	山田利吉主催の香城作品展観（～8日 名古屋美術倶楽部）
				香風会を創設
		10	16	第2回帝展（～11/22）に「雨に煙れる琴平」出品
1921	大正10	1		西山画塾青甲社が創立し、塾員となる。
		5		南支方面を訪問
1922	大正11	10	14	第4回帝展（～11/20）に「細雨蕭々」出品
		11	16	神戸美術協会第1回展覧会（～26 兵庫県工業試験場）に「松に鷹」出品
1925	大正14			第2回青甲社展（～6/2 岡崎商品陳列所）に「裾野の夏」出品
1926	大正15			第3回青甲社展に「落照」出品
				桜菊女学院で日本画の講師を委嘱される（～1942年）
1927	昭和2			第4回青甲社展に「鷹」出品
		10	16	第8回帝展（～11/20）に「晴雪皚々」出品
1928	昭和3			第5回青甲社展に「赤穂塩田図」出品
		10	16	第9回帝展（～11/20）に「港二題（長崎瓦市、平戸入津）」出品
		9		御大典奉祝名古屋博覧会美術展に出品、審査員を務める
				この頃渡辺幾春、喜多村麦子らと中京美術院を創設
1929	昭和4			第6回青甲社展に「黎明」出品
1930	昭和5	3	17	第2回聖徳太子奉賛展（～4/14）に「秋晨」出品
		4	26	山田画伯歓迎会（知多郡新舞子舞子館）に出席（山田画伯は山田秋衛のこと）
1931	昭和6	5	16	第8回青甲社展（～18日 京都岡崎第二勸業館）に「黄昏」出品
		10	16	第12回帝展（～11/20）に「鶴の池」出品
1932	昭和7	5		姫路、名古屋で個展を開催？
				第9回青甲社展に「庭潦」出品
		7	7	9日まで朝見香城塾展開催
				新板名古屋名所図会の制作に関わる
1933	昭和8	10	16	第14回帝展（～11/20）に「憩ふ海女」出品
		12	19	諸家新作『当季』『新春』式紙小品展（～21日、神戸小橋屋会館）に出品
1934	昭和9	2	10	『芸美』の「諸家感想希望塔」で敬服する画家に古径、華岳、溪仙を挙げる
		3		芸美創刊五周年記念展覧会に出品（予定）
		5	1	大礼記念京都美術館美術展（～25日）に「黄昏」出品
		9		『塔影』に香風会第十四回展「祭の宵」掲載
		10	16	第15回帝展（～11/20）に「春の宵」出品
		12		『塔影』に名古屋市美術第六回展「春日午後」掲載
1935	昭和10	6		『日本美術』に「雨後」掲載
		12	7	朝見香城新作展（～8日 名古屋美術倶楽部）
				この頃杉浦冷石が「中京作家評伝（二）『春の宵』の作者 朝見香城氏のこと」執筆
1936	昭和11	3		『塔影』に中京作家総合展「春致」掲載
		10	16	文展鑑査展（～11/3）に「白日静閑」出品
1937	昭和12	4		『塔影』に阿佐美塾展「名工」掲載
		4	9	朝見香城日本画個展（～11日 名古屋・丸善）
1938	昭和13	3	26	第11回青甲社展（～28日 大礼記念京都美術館）に「軍鶏」を出品
		4	9	朝見香城新作展（～11日 名古屋・丸善）
		8		傷痍軍人慰問画「香魚」を制作し、姫路陸軍病院に納入される
1939	昭和14	5	11	朝見香城、渡辺幾春作品展（～13日 銀座・松坂屋）
		6	15	朝見香城小品展（～17日 名古屋・三星百貨店）
1940	昭和15	4	3	朝見香城個展（～5日 名古屋・丸善）
		6		『塔影』に「朝見香城氏個展」掲載
		6		『塔影』に杉浦冷石「朝見香城氏個展」掲載
		7	15	南洋諸島方面に出発
		12	7	朝見香城画塾展（～8日 名古屋美術倶楽部）

1941	昭和16	4	1	個展開催（～3日 名古屋丸善）、「飛躍」「ウラカス火山」「リーフの内海」他14点
		5	16	青甲社海軍献画展（～18日 京都公会堂）に「筑摩 城址ヨリ千曲川ヲ望」出品
		6		『塔影』に図版「彩帆」掲載（「朝見香城氏南洋土産展」出品）
		6		『塔影』に杉浦冷石「朝見香城氏南洋土産展」掲載
1943	昭和18	3	30	青甲社産業戦士贈画展京都内示展（～4/4 京都大丸）に「御芳野の朝」出品
		3		『産業戦士贈画展』に図版「御芳野の朝」掲載
				「御芳野の朝」は立川飛行機株式会社に献納されることとなる
		11		『香城画集』発行
		12		東京松坂屋、名古屋丸善で個展
1946	昭和21	11	2	第1回復興姫路市美術展（～22日 亀山本徳寺）に「錦秋」を招待出品
1947	昭和22	5	16	第2回姫路市美術展（～31日 姫路城西の丸）に「鯉」を招待出品
1948	昭和23	5	1	第3回姫路市美術展（～20日 姫路城西の丸）に「龍孫之図」を招待出品
1949	昭和24	5	11	第4回姫路市美術展（～31日 姫路城西の丸）に「砂丘」を招待出品
1950	昭和25	5	11	第5回姫路市美術展（～31日 姫路城西の丸）に「牡丹」を招待出品
		11	3	愛知県教育委員会文化教育功労賞を受賞
1951	昭和26	5	11	第6回姫路市美術展（～31日 姫路城西の丸）に「蔬菜ト果物」「鯉」を招待出品
		10	28	第7回日展（～11/28）に「松林図」出品
1952	昭和27	5	11	第7回姫路市美術展（～31日 姫路城西の丸）に「ローテーション」「静物」を招待出品
1953	昭和28	5	11	第8回姫路市美術展（～31日 姫路城西の丸）に「庭の一隅」「鳩」を招待出品
1954	昭和29	5	11	第9回姫路市美術展（～31日 姫路城西の丸）に「城跡」「舞妓」を招待出品
		10	29	第10回日展（～12/1）に「白鷺城」出品
				この年より自宅を画塾として開放し、子どもたちに指導
1955	昭和30	5	11	第10回姫路市美術展（～31 姫路城西の丸）に「薄ら日」を招待出品
		10	29	第11回日展（～12/1）に「洋犬図」出品
1956	昭和31	5	1	朝見香城画塾展（～3 名古屋丸善画廊）
		5	12	第11回姫路市美術展（～31日 姫路城西の丸）に「スピッツ」を招待出品
1957	昭和32	5	13	第12回姫路市美術展（～6/2 姫路城西の丸）に「閑寂」を招待出品
		11	1	第13回日展（12/2）に「郷愁」出品
1958	昭和33	5	13	第32回青甲社展（～18日）に「冬日」出品
		6	3	第13回姫路市美術展（～8日 やまとやしき百貨店）に「室内風影」を招待出品
1959	昭和34	5	1	朝見香城先生古稀個展（～8日 名古屋松坂屋）
		6	9	第14回姫路市美術展（～14日 やまとやしき百貨店）に「午さがり」を招待出品
1960	昭和35			森月城と双城展を開催する
		6	7	第15回姫路市美術展（～12日 やまとやしき百貨店）に「清浄」を招待出品
				この頃「古希記念展画集」を発行
1961	昭和36	6	6	第16回姫路市美術展（～11日 やまとやしき百貨店）に「樹根」を招待出品
		11	1	改組第4回日展（～12/6）に「仙人掌」出品
				名古屋、ロスアンゼルス姉妹都市提携記念に「極楽鳥花」を献上
1962	昭和37	6	8	第17回姫路市美術展（～13日 やまとやしき百貨店）に「汀」を招待出品
1963	昭和38	6	4	第18回姫路市美術展（～10日 姫路市公会堂）に「密柑」を招待出品
1966	昭和51	5	3	喜寿記念朝見香城日本画展（～8日 名古屋松坂屋）
1970	昭和45	6	1	『中部日本美術家大系』に「心の若さ…画壇の長老 朝見香城」掲載
1974	昭和49	8	29	逝去
1997	平成9	4	12	「郷土の美人画考」展（～5/18 名古屋市美術館）に「五月雨美人」出品
その他 (朝見香城の履歴より)				久邇宮家御殿天井絵揮毫
				閑院元帥宮御前揮毫
				ルーマニア皇太子御前揮毫
				シヤム皇帝作品献上
				満州国皇帝作品献上
				日本画資材統制協会支部長
				旦々会、旦友会を組織

本稿の作成にあたりまして、朝見行雄氏に多大なご協力をいただきました。ここに感謝の意を表したいと思います。

※朝見香城作品を所蔵する美術館等

愛知県美術館 古川美術館 名古屋市博物館 田原市博物館 姫路市立美術館

※主要参考文献

『香城作品集』1920年（名古屋美術倶楽部）

杉浦冷石「中京作家評伝（二）『春の宵』の作者 朝見香城氏のこと」掲載誌不明

『香城画集』1938年 朝見香城

『香城画集』1943年 朝見香城

『朝見香城古稀記念展画集』1960年 朝見香城

『藝術サロンニュース』1966年5月

『喜寿記念画集』1967年 朝見香城

『中部財界』1967年11月

『日経ジャーナル』1968年7月

『中部日本美術家大系』1970年 名古屋タイムズ社

『図説 中京書家画人考』1974年 服部徳次郎

『日展史 4 文展編四』1981年 社団法人日展

『郷土の美人画考－江戸から現代まで－』1997年 名古屋市美術館ほか

『アートペーパー』93号 2013年夏号 名古屋市美術館

（ひらせ れいた・当館学芸員）

姫路市立美術館 研究紀要 第14号

平成26(2014)年3月発行

発 行 姫路市立美術館
兵庫県姫路市本町68-25
tel.079-222-2288

印 刷 所 小野高速印刷株式会社
姫路市平野町62

